

「21世紀初頭のチュコト半島の先住民捕鯨」

Eduard Zdor (米国・アラスカ大学フェアバンクス校)

チュクチやシベリア・ユピックとクジラとの関係は 1000 年の歴史を有する。今日、国際法、連邦法、地域政府の法そして慣習法のすべてがチュコト半島の先住民捕鯨を規制している。国際捕鯨委員会 (IWC) のメンバーとして、ロシア連邦政府は 1990 年代半ばよりチュコト半島の先住民捕鯨のためにホッキョククジラとコククジラのクオータを義務として守ってきた。伝統的生業を経済的に支援しているチュコト自治管区政府の管轄の下で、先住民組織がクオータを自己管理してきた。捕鯨で得た産物は、慣習法に則って分配されている。現代的なやり方で実施されているチュコト半島の捕鯨は、古くからの実践の基盤を守り続けてきたのである。捕鯨者は、離頭鉞に結びつけたブイをクジラに目印をつけるために用い、しとめるために爆発弾式銃とライフルを使用する。まれにはあるが、チュコト半島の捕鯨者はいまでも鉞(lance)を使うことがある。航行のための伝統的知識ではなく、GPS のような衛星機器やインターネットプログラムの使用、そしてオールと帆ではなく、船外機付きエンジンの使用は、捕鯨チームの構造と規模を変化させた。次にこれらの要因は家族やコミュニティの紐帯に悪影響を及ぼし、結果として現代のチュコト半島の先住民ハンターの世界観を変化させている。